

## 微笑庵便り 2019年11月号

五尺の観音仏頭を彫り上げてから、普通の教材に戻り、救世観音や宗琳先生の教本にある聖観音などを彫りましたが、その頃の私はまだ20代で若かったし、向こうっ気もかなり強かったので、やりすぎて失敗などは結構しょっちゅうやっていました。そんな中、一年位遅れて一人の女性が教室に入会してきました。彼女は“自分のやるべきことはすべてやったので、余生で仏像を彫ってみたいと入会した”、と言う人でした。見た感じでは50代後半から60代前半くらいでとても余生なんて感じではありませんでしたが、何となく“やることはやった”と言い切る人の底力は徐々に私にも伝わってきました。

ともかく、失敗をしないのです。彫刻は、あやまって取っしまえばやり直しがきかない世界、でもそれはなにも彫刻に限ったことではありません。どんな世界でも仕事は失敗が許されません。ですから、失敗をしないように考え抜き、あらゆる準備をし、訓練もし、そのものにたち向かう。彼女はすでにそういう失敗できない世界で生きてきた人でした。彼女の仕事は道明の組み紐。道明では一番上に頭脳ともいえる研究員というごく少数の人がいて、その次に組手さん、そして売り子さんとピラミットのような形態になっている、研究員は組織全体の中でも数名、この人たちが、正倉院の御物の修理や複製に携わったりするそうです。(もう30年以上昔のことなので今は変わっているのかもしれませんが)とにかくどれほど厳しい世界で生きてきたんだろう、おぼろげながらも感じる事が出来ました。仕事で磨かれ続けてきた覚悟と感性、まだ仕事の“仕”の字も知らない20代のひよっこにかなうはずがありません。当時の私には何が違うのかさえ分かりませんでした。ただ、その人のすごさを感じ、私はこのようには彫れない、と認識したのは確かです。

ちなみに彼女のエピソードをもう一つ、彼女は座禅に取り組んでいました。行っていたのは東中野の鉄舟会で大森宗玄老師に参禅もしていたようです。コレマタ厳しい世界です。教室の何人かが“座禅するにはどうするの?”とか、“それはどこにあるのとか”聞いたことがありました。後で彼女が言った一言、“いろいろ聞いてくる人はやらない、やる人は何も言わないでやっている”と。確かに、当時私もすでに文京区にある龍雲院、小池心叟老師の白山道場に行き始めており、なんだかそれを聞いた時は妙に納得してしまいました。

20代の時期に彼女のような人と出会えたのはやはり幸運なことだったと思います。当時彼女がさらっと言っていた“使う神経はみな一緒だから・・・。”という言葉は今もはっきりと自分の中に残っています。

